
スイッチ×2=大変です...

ワト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイッチ×2Ⅱ大変です…

【Nコード】

N5290Z

【作者名】

ワト

【あらすじ】

高校の入学式当日に遅刻した俺、峰斗は生徒会長に捕まってしまう。さらに昔助けた女の子とその会長がいきなり彼女の立候補に…
・ しかも2人共可愛いときた… これからどうなるんだ、俺…

今日は高校の入学式…なのですが俺武原峰斗は只今絶賛遅刻中です、何故入学式に遅刻？と思うかもしれませんがそれは、あの時計のせいなんです…高校に受かったと同時に1人暮らしをはじめ毎日同じ時計のアラームで朝起きてたはずなのに今日に限ってあの糞時計ならなかったんです…だから只今俺は絶賛遅刻中なんです。

「その生徒、新入生だろ何故入学式の日から遅刻している？」
うわぁ綺麗な人だなぁ…生徒会の腕章をつけているって事はこの生徒会の人なのかな？。

「何を黙っている？それにその前髪長くないか？入学式の日なんだからちゃんとしなやかッ！」

「えっすいません…じゃあ俺体育館に行きますんで」

「ちよつと待て前髪はどうするんだ？」

ああ前髪どうしようかな…今からじゃどうしようもないしとりあえずこのままで行こうかな。

「明日切ってくるんで今日は勘弁して下さい」

「いや今どうにかしないと、そうだッ！私が切つてやる」

「いいいえ結構です…それに髪切れるんですか？」

「大丈夫だ私に出来ない事はない、だからちよつとついてこい」

目の前にいる綺麗な人は、峰斗の腕を掴むとまだよくわからない学校の中を引つ張り生徒会室につくとドアを開けて入った。

「さぁ中に入れ、誰もいないからって変な気は起こすなよ？ただ前髪を切るだけなんだからな」

「起こしませんよ…早く前髪を切るなら切つて下さい」

「わかつている動くなよ？動いたら変になるからな」

峰斗が頷くのを確認すると、近くにあつたハサミを取りだし前髪を切りはじめた…。

「あっあの切りすぎじゃないですか…？」

「大丈夫だこの位でちょうどいい!？」

前髪を切り峰斗の顔が見えるようになると思いきや急に顔を赤くしはじめた。

「急に顔を赤くしてどうしたんですか?もしかして風邪ですか」

「君の名前はなに?よかつたら教えてくれない?」

「おっ俺の名前ですか?俺は武原峰斗です」

「そっか武原峰斗か?彼女や好きな人はいるの?」

さつきからこの人おかしいような、それに雰囲気が変わった気がする……。

「いいいんですけど……ってこんな話し俺が恥ずかしいだけじゃないですか」

「あつごめんね?彼女とか好きな人がいるのかなあつて気になって……」

「いや謝らなくてもいいです……でもどうしてそんな事が気になるんですか?」

「それは……あのさ峰斗君に彼女がいらないなら私立候補でもいいかな?てかさせて下さいッ!」

立候補……?立候補!……?何で今日初めてあつた人がそんな事言うわけ?意味がわからない……。

「あつあの……俺は先輩の名前も知らないし、てか何も知らないんですけど」

「あつ忘れてた……えつと私は二年の立花美紀です、一応生徒会長です」

「立花先輩ですか……でも何で俺の彼女に立候補するんですか?」

「それは……言わなきゃ駄目かな?恥ずかしいんだけど……」

恥ずかしい、言いたくない、立候補……もしかして一目惚れ!?

「理由がわからないと立候補はちよつと……」

「えつ……笑わないでね?私峰斗君に一目惚れしたの、だから立候補したいの」

やっぱ俺が思ってた通りだったか……。

「でも立花先輩って綺麗だから彼氏いるんじゃないですか?それに

男子から人気そうだし」

「あのさ立花先輩って呼ばれるのいやかも…あと私彼氏なんてできた事ないよ？」

「本当にできた事ないんですか！？いそうなのに…名前は立花先輩以外なら何て呼ばれたいんですか？」

「本当にいないよ、いたら立候補何てしないし…名前は美紀って呼んでほしい」

美紀か…美紀先輩、美紀さんどっちで呼べばいいんだろ？

「あつても美紀に先輩とかさんとかつけないでね？呼び捨てで呼んでほしいの」

「でも歳上だし…それに生徒会長なんですよね？歳下の俺が呼び捨てにしたら周りの先輩達が…」

峰斗が顔をしかめながら言うと、美紀はああと理解したように頷いていた。

「だから呼び捨てにはできませんよ…美紀さんが美紀先輩ってなら呼べますけど」

「ううんじゃあ他の人がいるときはそれでいいけど、2人の時は美紀って呼んでくれる？」

「まあ2人になる事があれば…ってこんなゆつくり話してる場合じゃないんですよ、入学式始まるじゃないですか」

「あつそうだった…じゃあ早く髪切り終わらないとね」

ハサミを前髪に近づけると凄く速さで切り終わった、そしてお礼を言うと峰斗は、生徒会室から出て体育館に向かった。

「峰斗君かつこよかったなあ…私一目惚れ、いや男の子を好きになったの初めてかも」

「会長、そろそろ体育館に向かわないと入学式が始まりますよ」

「ああ由香か…わかった今すぐ向かう、入学式には遅れられないからな」

美紀はそう言うと体育館に向け歩き始めた、そして体育館では峰斗が席を探していた。

「席どこだよ…こんなに人が多かつたら見つからないよ」

「あつあのお…あなたの席多分私の席の隣だと思います」

声のしたほうを見てみるとそこには、眼鏡をかけ髪を目までおろしたいいかにも地味な女の子がいた。

「あつありがとう…ってだれ？知り合いじゃないよね？」

「私皆川ヒメついていいいます、多分同じクラスになると思う…とりあえず席につこうよ」

「そうだね…あつ俺武原峰斗っていうんだこれからよろしく」

「うんよろしく、じゃあ行こつかもうすぐ入学式始まるし」

峰斗は頷くと、前を向き歩き始めたヒメの後ろをついていった、そして席につくとすぐに入学式が始まり校長の話し、新入生代表の話し最後に生徒会長の話しが始まった。

「ねえ峰斗君、生徒会長の人綺麗だね、私とは大違い…」

まあ確かに綺麗なんだけど、さつきあんな事があつたからあんま直視できないんだよね…

「確かに綺麗だけど皆川さんだつて髪を上げて眼鏡をとれば…」

うそ！？まじで可愛いんだけど…髪を上げれば美紀さんと同レベルかもしれない…。

「ちよつちよつと峰斗君！？髪上げないで、私顔に自信がないからこんな風に隠してるのに…」

「それ本気で言ってる？本気で言ってるならそれは間違いだよ…」

「それどうゆう事？、もしかして私が思ってる以上に酷いの！？」

まああるいみ酷いかも…こんな可愛い顔で自信がないとか他の女の子が聞いたら絶対怒る…。

「皆川さんが思ってるほうの反対、皆川さん自分じゃ顔に自信がないって言ってるけど、俺はそんな事ないと思うだつて普通に皆川さん可愛いもん」

「えっ！？私が可愛い…いやいや絶対にそんな事ないよ、もしかして峰斗君つてB選…？」

皆川さんを可愛いって言つてB選なら他の女の子なんてどうなるん

だろ…。

「おいそこの一年2人、話してないで私のいや生徒会長の話をきけ！？」

あつ気づかれた、まあ俺は知らないフリをして無視するんだけど。

「皆川さんと話すの楽しいけど今は静かにしとこつか、あの生徒会長に怒られるし」

「そうだね、楽しいけど先輩に怒られるの怖いし静かにしてるよ」

2人は互いの顔を見ながら笑うと前を向き美紀の話を聞き始めた、そして入学式が終わり教室に行こうと2人で廊下を歩いていると後ろから声をかけられ立ち止まった。

「おいお前達、さっき私の話を聞かずに話していた2人だな？」

「あつ生徒会長さん…峰斗君、どうしよう怒ってるのかな？」

「怒ってるように見えるけど…まあ別に大丈夫なんじゃない？」

ただ気になるのは、口調と雰囲気立候補するって言った時と全く違う事なんだよね…。

「何故私の話を聞かずに2人で話していたんだ？それとお前は武原を何で峰斗君って呼んでるんだ」

あれ峰斗君って呼んでたのに今武原って…何で？

「えつと友達だから？峰斗君と私って友達だよな？」

「まあ皆川さんがいいなら友達だね、今日初めて会ったばかりだけど」

「じゃあ友達で、あれ？生徒会長さん何で峰斗君の名前知ってるの？知り合い？」

ここで知り合いって言ったらおかしいよな…普通入学したばかりの人が生徒会長と知り合い何てありえないし。

「私は武原の彼女候補だ、だから知り合い以上だな」

「ちよつと美紀さん！？こんなに人が多い所で何言ってるんですか」

「私は彼女候補じゃないのか…？私はてっきりもう彼女候補だと思ってた」

峰斗は、新人生や先輩達からの殺気がこもった視線を感じ焦ってい

た。

「ちょっと待って下さいッ！何で初めて会ったはずの生徒会長さんが彼女候補何ですか？」

ヒメが言った事に周りにいた男子達も頷いていた。

「それは、私が武原の彼女に立候補したからだ」

「って事は峰斗君に一目惚れしたって事ですよね？」

「まあそうなるな、それに一目惚れしたから彼女に立候補したんだ」「じゃあ私も峰斗君の彼女に立候補しますッ！」

周りにいた男子も峰斗も美紀も急な展開に理解ができていなかった。

「峰斗君ごめん…私一回峰斗君に会った事あるんだ、覚えてないかもしれないけど…」

「俺と皆川さんが会った事あるの！？ごめん覚えてない…」

「私と峰斗君が会ったのは、去年の夏で男子に苛められてる所を助けてくれたの」

俺色んな人を助けてるからなあ…去年の夏だって10人は助けだし、叩かれたり悪口言われたりしてる私を男子達から守ってくれて、その後も色々優しくしてくれた」

「ごめん覚えてない…何かヒントがあれば思い出せるんだけど」

「じゃあポチって言えば思い出す？」

ポチ…ポチ！？あのいつまでもついて来たから何となくポチってあだ名をつけた女の子か…。

「思い出したみたいだね…私があの時峰斗君が助けてくれたポチです」

「まじでポチなの…？全然気づかなかった」

「へへへ、私は最初から気づいてたんだけど言い出せなくて」

でもあの時のポチが皆川さんであんなに可愛いなんて…。

「武原、話しについていけないんだか…結局こいつは知り合いなのか？」

「知り合いのポチです、今思い出しました…」

「知り合いじゃありません、私は峰斗君のペットのポチです」

ペットという言葉聞いて周りにいた人達も近くにいた峰斗や美紀も固まってしまった。

「ほらあの時峰斗君がお前、昔飼ってたペットみたいって言ってたし」

「だからってペットはないんじゃない？俺ポチがペット何て言ってないよ」

「私になるって決めたからいいの、それに最初はペットかもしれないけどいつかは彼女になるんだから」

最初も何も人間のペット何ていらないんだけど…。

「おいその男ッ！こんなか弱そうなの少女をペット扱いとは何様だ」

周りにいる野次馬を押し退け知らない男が峰斗の胸ぐらを掴んで大声で言った。

「お前誰だよ…それに俺はポチをペット扱いなんかしてねえ」

「僕はレディの憧れの的、高谷正樹だッ！」

「いや知らないし…それにレディの憧れの的って自分で言うって恥ずかしいの？」

「僕は本当の事を言っているだけだよ、それはこの美貌を見ればわかるだろ？」

美貌ってこいつ別にイケメンじゃないし…てか普通より下だ。

「とりあえず離してくれない？苦しいんだけど…」

「いや離さないよ、僕はこのか弱そうな少女がペット扱いされてるのが許せないからね」

「おい…峰斗君が離せって言うてるんだから、さっさと離しやがれッ！」

ポチが変わった！？チワワから土佐犬並みに変わった…。

「僕は君がペット扱いされないようにこの男と話しているんだよ、それとこれから君に近づかないように」

「誰がそんな事を頼んだ？むしろ私は峰斗君のペットでもいいから側にいたいんだよッ！」

「君の名前は何て言うんだい？僕は今から君の事を助けるんだから名前位聞いてもいいよね？」

こいつポチが言ってる事を全然聞いてない…。

「私の名前はポチだよ、峰斗君がポチってつけたんだからそれが私の名前だ」

「違うそれは君の本当の名前じゃないだろ？」

「私はポチだ峰斗君のペットのポチだッ！」

「だから君はこの男のペットじゃないんだよ…まさか洗脳しているのか！？」

うわぁこいつうざい…周りにいる人達も明らかに引いてるし。

「君がこの男のペットで側にいたいというのは洗脳されているからだ…よしッ！これからはずっと僕が君の側にいてあげる、だからこの男の事は忘れるんだ」

「私は峰斗君以外の人の側になんかいたくない、それにお前みたいなナルシストで上から目線の奴の側はもつといたくないッ！」

「僕の優しさがわからないとは…もういい穏便に済ませようと思っただがやめだ、今からこの男を叩きのめす」

胸ぐらを掴んでいた手を峰斗から離すとおもいつきり峰斗の顔を殴った。

「いつてえ…急に殴る事ないだろ？それにお前勘違いしすぎ」

「峰斗君の顔を殴った…もう許さない」

「それは私も同感だ、私の好きな人を殴る奴は許さん」

「生徒会長さん、あなたもこの男に洗脳されているのか…お前はそんなにレディを侍らせたいのか？最低の奴だな」

最低と言われた峰斗は一瞬キレそうになったが必死にキレるのを抑え我慢していた。

「君達2人もそうだ、洗脳されたからといってこんな最低の男を好きになるなんて…僕を好きになっていればよかったのに」

「ははは、お前どんだけ俺を悪く言えばいいんだよ…それに2人がお前の事を好きに？絶対にならねえよッ！」

峰斗が言った事に2人も頷いていた。

「それはこの美貌を見てから言っただけいいね、君より僕のほうが格好いいんだから2人も君より僕を好きになるはずさ」

「この中の下のナルシスト野郎が…お前友達いねえだろ？」

「最低な君に関係ないだろ、それに僕は女の子の憧れの的なんだよ」

「じゃあ周りにいる女子に聞いてみようぜ…こいつは周りにいる女子達の憧れの的がどうかをよ」

完全にキレた峰斗は正樹にそう言うのと近くにいた女子に聞き始めた。

「美紀やポチはこいつの事どう思う？憧れの的か？」

「そんなわけないだろ、私は武原以外の男には興味ないしな」

「私も峰斗君以外の男の人以外興味ない、それにあのナルシストはまず生理的に無理」

「そうだよなじゃあ他の人達はどうだ、こいつは憧れの的か？」

大声で近くにいた人達に聞くと周りにいた人達は首を横に振ったり違うと叫んだり返事を返してくれた。

「どうだ、お前は憧れの的じゃないんだってよ…」

「ここにいる女子全員を洗脳したのか…君はどれだけ最低なんだ？君みたいな男は僕が絶対に叩きのめす」

正樹はそう言うと、峰斗に近づきまた顔を殴ろうとした…しかし完全にキレている峰斗はそれを避けると正樹の頭に回し蹴りを食らわせた。

「何回も殴らせるかよ…ってこいつ気絶してるし」

気絶しているとわかった峰斗は苦笑いしていた、そして周りにいる人達からは歓声が上がリ峰斗達の周りは騒がしくなっていた。

「こいつ口だけだったんだな…にしても勘違いしすぎだろ」

「峰斗君って強いんだね？助けてもらった時は殴られてただけだから知らなかった」

「まあ今回は特別って事で、普段はキレないから殴る事もないし」

「これは生徒会長として許してはいけない事だ…しかし今回はあいつが一方的に悪いから内緒にしておこう」

…」

「それはどうも…っていつまでもここで騒いでたら先生達が来るな
さすがに騒ぎを聞きつけたのか先生達はもうこの場所に向かってい
た。」

「仕方ない…皆さんいい加減ここから逃げないと先生達が来ますよ、
それじゃあ俺達は逃げるんで皆さんも逃げて下さいね」

峰斗は周りにいる人達に大声で叫ぶと美紀とポチの手を握って走り
始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5290z/>

スイッチ×2=大変です...

2011年12月17日22時48分発行